

第2節 あす、ヨコハマは、

新地域主義——地域の再発見

都市化の進展は、私たちの生活の中から、地域を奪ってきた。定住化、高齢化、成熟化の新しい波は、生活文化の場としての地域を、再び登場させようとしている。

今、なぜ地域か

人口310万、そこには多様な市民の生活があり、多様な市民の想いがあり、また、活動の舞台となる地域にもさまざまな顔がある。

高度経済成長による都市化の進展は、物質的豊かさの追求と、仕事優先の価値観をとおして、私たちから地域をうばってきた。

しかし、私たちは生活の質ともいべき、精神的豊かさを大切にするようになった。心の豊かさは、家族や社会との結びつきのなかで見いだすものであり、一番身近な社会としての地域社会が、ふたたび見なおされようとしている。

また、高齢化の進展は定住化志向をいちだんと高めており、人びとの目を地域に向けようとしている。

さらに、職場から退いた高齢者にとって、社会的集団にたいする帰属意識は、精神的安定を支えるものであり、地域社会のなかに、そうした役割が求められようとしている。

地域を支える3つの要素

余暇時間の増大や価値観の多様化にともない、



さわやか運動…まちをきれいにすることは、私たちの心もきれいにしてくれる

人びとは、学習、趣味、スポーツなど、さまざまな目的をもった文化的活動を生活の一部として行うようになり、こうした「生活文化活動」を地域のなかで展開するようになった。

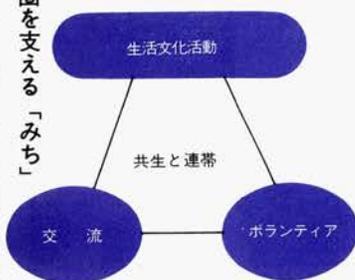
また、地域においてくりひろげられる多様な市民の活動は、生きがいを求めた自己実現の活動である。したがって、それは自発的で創造的な活動であり、そうした意味で、地域における市民活動の担い手として「ボランティア」(自由意思で自発的にことを行う人)のはたす役割は、きわめて大きいものといえる。

さらに、地域には、子どもからお年寄りまでの多様な世代が存在し、こうした活動主体のさ

まざまな異なった価値観の「交流」をとおして、人びとは他者を知り自分を知るとともに、新しい飛躍の一步をふみ出すことになる。

こうした「ボランティア」によるまざまな「生活文化活動」をとおして、市民が「交流」することにより、地域のなかで「共生と連帯」がはぐくまれていくことであろう。

日常生活文化圏の概念図

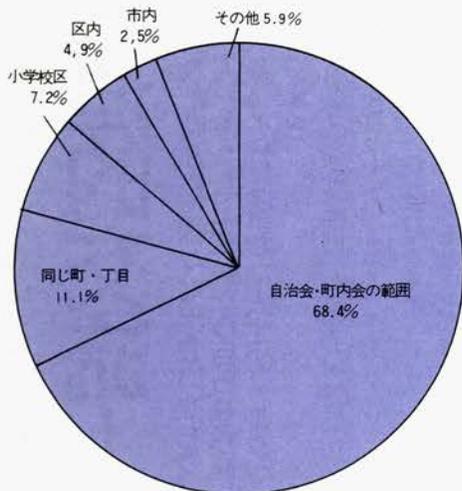


生活文化圏を支える「みち」

「わが地域」と感じる空間はけっして広いものではない。地域のなかの自然、歴史、人びとに親しみや安らぎをおぼえるのは、せいぜい向こう三軒両隣か、広くても自治会町内会の範囲である。

■私のまちと言えるのは

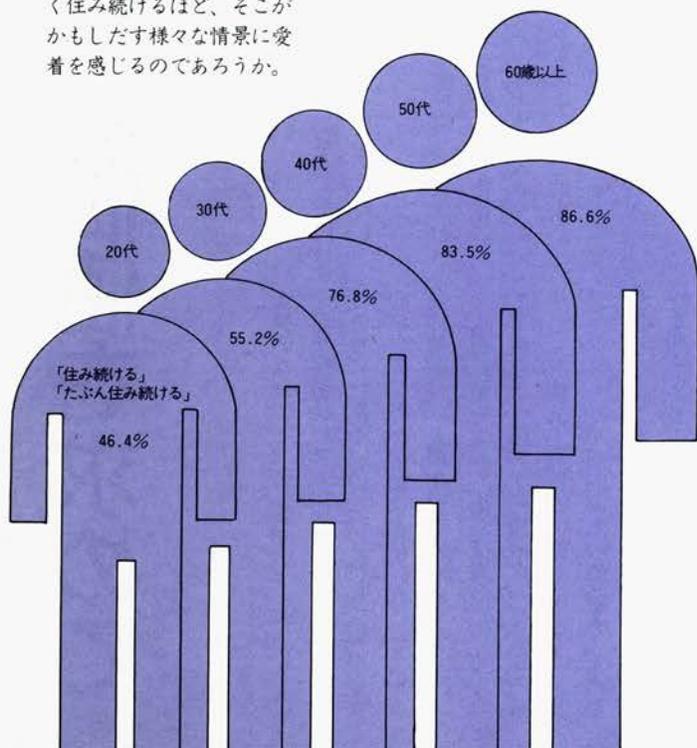
約7割の人が自治会、町内会の範囲までで、区内4.9%市内2.5%と僅少である。地域は決して広いものではない。



横浜市「市民意識調査」(昭和58年度)

■高齢化は定住化を進める

人は、住んでいる場所に長く住み続けるほど、そこがかもしたす様々な情景に愛着を感じるのであろうか。



横浜市「市民意識調査」(昭和62年度)

市民の生活文化活動は、こうした地域のなかりひろげられるだけでなく、地域をこえた活動など多様な広がりを見せている。地域をこえた活動は、鉄道や道路網などの「みち」によって大きく左右される。そうした意味で、生活道路をはじめとした「みち」の広がり、人びとの交流を通して地域の文化を生み出し、豊かな市民生活を実現していくことである。

地域における区役所の役割

21世紀は、地域がふたたび主張する時代である。

地域は、人びとの生活の拠点であり、生活をベースとしたさまざまなニーズに対応していか

なければならない。(総合化)

同時に、地域は独自の自然、歴史、文化を有しており、こうした地域特性を生かすことにより、わがまちの誇りをもち続けなければならない。(個性化)

また、地域は日々くりかえされる生活の舞台として、地域の問題は地域で解決しなければならない。(元結化)

こうした「総合化」「個性化」「元結化」をはかるうえで、市民にとってもっとも身近な区役

所のはたす役割は、ますます大きくなっている。豊かな市民生活は、豊かな地域によって支えられ、それは、区民と区役所が一体となつてつくり、そだてていくものである。

愛着心は、「知る」ということから生まれるものである。地域の自然を知り、歴史を知り、人びとを知る。そのとき私たちの心のなかに、「ふるさと」が芽ばえ始める。